



TITLE:

京都大学におけるフランス研究の 歴史

AUTHOR(S):

岩永, 大気

CITATION:

岩永, 大気. 京都大学におけるフランス研究の歴史. 仏文研究 2017, 48: 187-214

ISSUE DATE:

2017-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/228188>

RIGHT:

許諾条件により本文は2018-11-01に公開

京都大学におけるフランス研究の歴史

岩永 大気

はじめに

本稿は、京都大学におけるフランス研究の流れを概括するものである。京都大学人文科学研究所「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」の主要テーマのひとつ「京都における日欧交流史の初期調査」の一環として、平成28年度総長裁量経費により進められた研究調査プロジェクト「京都学派」の批判的継承とその新展開の一部をなす。

0. 京都大学フランス学の三つの場とその関わり

京都大学におけるフランス研究の歴史を知るためには、まず研究の舞台となった三つの場の変遷を知る必要がある。この三つはそれぞれが独立のものではなく、相互に関連付けられているため、厳密に三つとすることはできない。しかし便宜的に、京都大学におけるフランス学は、現代における名称を用いるなら文学部、総合人間学部、人文科学研究所という三つの流れがあるとすることができる。それぞれにおけるフランス学の内容を知るより先に、まずはこの三つの場がどのように生まれ、関係し、今の形に至ったかを概観しておくことが必要である。

京都大学の前身である京都帝国大学は1897年に設立された。前身とはいえ、この施設は今でいう京都大学大学院に相当し、今の四年制の大学教育に当たる高等教育は別の教育施設で行われていた。それが、のちの京都大学総合人間学部の源流と言える第三高等学校（三高）である。高等学校とはいえ今とは教育制度が根本的に異なり、原則として大学入学時に試験は行われず、三高の学生はほとんど自動的に京都帝国大学に進学することができた。現在の京都大学入学試験が果たしている学生の選抜機能は三高の入試が果たしていたのである。従って、三高の教師も現在の大学教員と同等の地位にあった。三高の教員となり、のちに京大教養部、文学部で教鞭を執った生島遼一は、当時を回想し、学生が尊敬していたのは断然三高の教師であり大学教員ではなかったと述べている。

こうした制度が抜本的に改革され今の大学制度につながっていくきっかけとなったのが、1945年の敗戦である。この敗戦をきっかけに、京都帝国大学は京都大学となり、第三高等学校は解体

されて京都大学に吸収されることとなる。伝統ある三高を残す運動は根強くあったものの、解体に踏み切った背景には、GHQ が学閥の解体を強く推したということがあった。第三高等学校は京都大学教養部となり、その敷地は京都大学の学生により埋められることになる。現在の一般教養科目という制度は旧制高校の名残であると言える。こうして一般教養部門を一つの学部が担うことになったことで、例えば同じ学部の文学部と教養学部フランス学者が存在するという事態が起こることになる。実際に二学部の人的交流は盛んであり、文学部の欠員を教養部の助教授ないし教授から補充するという形が多く取られた。

京都大学人文科学研究所は、もともとは京都帝国大学とは別個の組織であった東方研究所(1929年設立)及び西洋文化研究所(1934年設立)と、京都大学の付属研究所として1939年に発足した(旧)人文科学研究所が統合されたことによって誕生した。統合の動き自体は1946年に遡るものの、実際に新体制が発足したのは1949年であった。新制人文研は、日本部、東方部、西洋部の3部から成り、11講座を擁していたが、そのうち西洋部(1講座)の主任となったのが桑原武夫であり、桑原は講座「ルソー研究」を率いた。ここに、京都大学におけるフランス研究第三の場が誕生したことになる。

このように、概ね敗戦を境に文学部、教養部(総合人間学部)、人文研という三つの場が整備され、この形が現在に繋がっていくのだが、黎明期の大きな機転として1950年に文学部教授太宰施門が退官したことがある。この期に新たに伊吹武彦が文学部教授に任ぜられ、講座の抜本的な見直しが行われた。この結果、フランス語学、フランス文学の授業担当に教養部、人文研の教授が関わるという現在につながる形が確立した。

以上の歩みを念頭に置き、以下では文学部、総合人間学部(第三高等学校、教養部)、人文科学研究所の三項目に分け、京都大学におけるフランス学の歩みを見ていきたい。

1. 文学部

京都大学におけるフランス学を理解するにあたって、やはりまずは仏文科を中心とした文学部について触れるのが適当だろう。第一部では、現京都大学の前身である京都帝国大学から、戦争を経て京都大学と改称し、現在に至るまでの流れを概説する。以下、特に断りがない限り、情報は基本的に『京都大学百年史』及び『京都大学文学部の百年』に依っている。

1-1. 京都帝国大学時代：京大仏文の黎明期—太宰・落合

京都帝国大学は1897年に開設され、文学部の前身である文科大学は1906年に開設された(1919年の帝国大学令によって京都帝国大学文学部となる)。開設にあたり、哲・史・文の三学科編成が取られたのだが、文科大学開設初年に開講されたのは哲学科のみであり、その翌年に史学が開講され、文学部が開講されたのはさらに翌年であった。フランス語講座すなわち西洋文学第三講座の開設は1925年を待たなければならない。1920年代を通して行われた学制改革により文学部

の学生数が急増し、結果として研究施設及び講座数の充実が図られた。西洋文学第三講座（フランス文学）が増置されたのもこの時期であった。フランス文学という科目名は文科大学開設当時すでに正科目としてあげられていたものの、実質的なフランス文学講座の始まりは、1921年10月に在外研究員としてフランス滞在中であった太宰施門（1889-1974）が京都帝国大学助教授として任命された時点であった。太宰は1923年2月に帰国、同年4月より正科目としてフランス文学を担当した。西洋文学第三講座が正式に設置されたのは、さらに2年あとの1925年である。

ここで、この時期の文学部における授業の概観を示しておこう。学生は入学時に哲学科、史学科、文学科のいずれかに所属することになる。各学科には、それに属する正科目と副科目があり、文学科の正科目には例えば国語学やフランス文学、言語学、副科目には語学や、教育学教授法、美学美術史などがあった。正科目の講義は普通講義、特殊講義、演習の3種から成る。普通講義は概説的なもので、原則的に1年生が履修する。特殊講義は専攻学生を対象とした、特殊な問題について教官が研究成果を講義するものであり、2年生以上が履修した。演習は、卒業論文の作成にあたる3年生を対象とし、専攻学生による研究報告を、教官が指導批判して研究方法を会得させることを旨とする。各学科の新入生は、まずは各学科に振り分けられた正科目の全科目から普通講義を履修し、次いで2年次には専攻科目を定めて研究方法を学び、最終の3年次に研究に実地に従事するという道筋を経て卒業することになる。こうした、研究の間口を広くとる制度は、形を変えて現在まで受け継がれており、本学の文学部の一つの特色に数えられるだろう。

さて、この時期のフランス文学の普通講義では、フランス文学の骨格を示す目的のもとに、広汎で基本的な知識を持たせるように努めた。講読は1年生向けに17世紀古典文学の代表作が、2回生向けに19世紀の主要な作品が取り上げられた。2年生の特殊講義（後の研究）は、限定された特定の問題をめぐってなされた。例えば落合のモンテーニュ、パスカル研究、太宰の古典悲劇総説、比較文学的に見た18世紀とロマン主義時代、バルザックの小説研究など。演習は3回生に卒業論文を準備させるかたわら、原典に対する更に深い読解能力の養成を目的とし、テーヌ、ブリュヌチエールなどの批評が主に選ばれた。

この時代は、落合と太宰という2人の教授を中心とした体制であったといえることができる。次代を彩る桑原武夫、生島遼一、河盛好蔵らはこの時代の京都大学に学んだのである。仏文科の中心となった教授は太宰施門（1889 - 1974）である。太宰は当時のカトリック的フランス文学を主要な対象とした研究を樹立しようと努め、17世紀と19世紀に重点を置いて、様々なジャンルの作家と作品を取り上げ、研究を続けた。主著には『バルザック研究』（1943）などがある。先に述べたように、太宰は1921年に文学部助教授に任命され、1933年3月教授に昇任している。1931年には落合太郎（1886 - 1969）が助教授に任ぜられる。落合は法科大学の講師であったのだが、文科大学の有力者であった藤代禎輔博士に請われ文学部に入った。和辻哲郎など、学友の推挙もあったのではないかと本人の回想がある（桑原武夫・生島遼一編『落合太郎著作集』p. 500）。落合と太宰はパリ留学時代の知己であり、元々は太宰を藤代に紹介したのも落合であったという（桑原武夫「解説」、桑原武夫・生島遼一編『落合太郎著作集』p. 528）。太宰、落合の二人については、後に自身も文学部でフランス文学を教授することになる生島遼一が、「太宰先生は、

日本では珍しいギリシャ正教の信徒であった。フランス文学では17世紀の古典主義文学を基礎として体系を立てておられ、講義もそういうオーソドックスなものだった。[中略] 落合先生は周知のとおり、モンテーニュとかパスカルなどフランス・モラリストの系譜をいつも熱情をもって私達にわかりやすく説かれ[後略]と両者の授業風景を伝えている(生島遼一「京大「仏文科」の初期」、京都大学文学部編『以文会友』p. 358-359)。生島は京大に赴任する以前は本稿第2部で詳しく触れることになる第三高等学校の講師だったのだが、彼の三高赴任のきっかけを与えたのが落合であった。落合の人気は高かったようで、生島の、「これらの仲間[河盛好蔵、吉村正一郎、桑原武夫]はみんな落合先生の崇拜者で、私や進藤誠一君(元九州大学教授)もこれに加わり、しきりに先生のお宅に通った」との弁は当時いかに落合が慕われていたかを物語る(上掲書、p. 357)。落合は1937年12月、教授昇任とともに言語学講座に転じた。その後は伊吹武彦、市村恵吾、林憲一郎、モンチニー(Montigny)の各講師が太宰を助けた。外国人講師たちによる教授が仏文科に対して果たした役割は大きく、太宰は回想の中で、フランスの最も優れた俊才たちを五、六人矢継ぎ早に迎えることのできた喜びを語っている(「外人教師」、『京都大学文学部50年史』、p. 450-452)。太宰は1931年12月、多年フランス語フランス文学の教育と日仏文化交流に貢献した功績により、レジオン・ドヌール勲章(シュヴァリエ級)を授与され、1949年5月、停年により退官し、京都大学名誉教授の称号を贈られた。

1-2. 1950-60年代：「京大仏文の黄金時代」－伊吹・生島・桑原

1945年、日本の降伏をもって太平洋戦争は終結し、日本国は占領状態に入った。占領政策は教育行政の面で大きな変容をもたらし、1949年より京都帝国大学も京都大学と改称のもと、新制大学に改組されることになった。新制大学は、元々京都帝国大学においては第三高等学校が受け持っていた教養課程を含む4年生大学であったことから、移行は困難を極めた。三高の終焉とその顛末については本稿の第2部に詳しいので、ここでは触れない。さて、新制大学の設置に伴い、新制大学院も発足した。京都大学文学部の新制大学院は1953年より発足し、文学部は文学研究科を設置した。旧制以来の講座はそのほとんどが存続することを認められた。

桑原武夫とともに共同研究に勤しんだ飛鳥井雅道は、戦後すぐの京大文学部におけるフランス文学研究に関して、「一種の黄金時代」であったと語る。「1950年代の初頭、京都大学のフランス文学科は、一種の黄金時代だった。伊吹武彦先生がラフォルクを語り、生島遼一先生はスタンダールとバルザックを語り、桑原先生はルソーを語っていた。」(飛鳥井雅道「戦中における芸術の自立性」、『桑原武夫集1』、「月報」p. 4) 無論彼らの前後にも偉大な人物が名を連ねるが、伊吹、生島、桑原という3人の巨大な学者が教鞭をふるったこの時代は、やはり京大仏文の一つの盛期を形作ったと言わねばならない。伊吹武彦(1901-1982)は、長らく三高で教鞭をとっていたが、1949年を境に京大教養部の勤務になり、太宰の退官後しばらく講師として文学部の授業を受け持ったのち、1950年に文学部教授に転じた。同時期には生島遼一(1904-1991)も三高から京大教養部へという道程を辿っているが、生島は教養部に留まり、彼が文学部の教授になるのは伊吹退官後の1964年である。戦後の京大文学部仏文科は伊吹武彦を中心にしてその体制が整えられ

たのであるが、伊吹は、戦後日本におけるフランス文学研究の著しい進歩を踏まえ、講座の授業内容を充実発展させることを焦眉の急とした。従来は17世紀及び19世紀が重視されていたところ、18世紀や現代も含めて幅広いカリキュラムを組むために、京都大学人文科学研究所教授桑原武夫、同吉田分校（後の教養部）教授生島遼一らを授業担当とした。人文研及び総合人間学部、人間科学研究所所属の教授が文学部フランス語学、フランス文学を担当するという構図は、現在にまで引き継がれている。1951年からは教養部の田中俊一、渡辺明正、林憲一郎、後藤敏夫、本城格の各助教授が加わり、後には同じく教養部から生田耕作、大橋保夫の両助教授も参加して、非常に充実した内容になった。本城は、1957年から教授に昇進する1969年まで、文学部の助教授を務めた。

1950、1960年代に中心的な役割を担った伊吹に関して、その来歴と仏文科での様子、そしてフランス研究における功績に触れておこう。伊吹武彦は大阪の出身で、1922年に京都の第三高等学校を卒業すると、仏文を志す同士とともに東京大学の仏文科に進む。当時京大にはまだ仏文科がなかったのである。東大を卒業するとすぐ、母校である三高へ戻り、フランス語の教師となる。三高から京大へ移った経緯は上記のとおりである。伊吹の流麗な授業について、西川長夫は「伊吹先生の授業は始めから終りまで、脱線の部分も含めてすべて計算しつくされており一言の無駄もない。フランス的エスプリのお手本のような名講義で、特に見事なのは最後の落ちと引け際だった。名優が今日はどんな言葉を残して退場するか、それが楽しみだった」と述べている（西川長夫「桑原先生と戦後世代」、『桑原武夫集9』、「月報」、p. 7）。自身の研究においてはラクロ、フロベール、A・フランス、プルースト、サルトルの小説や19世紀の詩など幅広く仏文学の翻訳・研究を行う一方、白水社刊『仏和大辞典』の編集にも尽力した。他に伊吹の功績としては、日本フランス文学会の発足に携わったことがある。会の発足以前は、「フランス文学会」が、東京で開催される年に1、2本の講演を催していたのみであった。伊吹らは1950年秋の総会を京都で行うことを申し出、全国的な総会及び一般的な研究発表を行うことに成功、当日フランス文学会は「日本フランス文学会」と改称され、会則を作り、学会としての体制を整えるに至った。同関西支部会は55年に発足、伊吹が初代支部長を務めている（『京都大学文学部50年史』p. 243）。伊吹は1961年にフランス政府の招きでフランスに滞在し、同年11月、レジオン・ドヌール勲章（シュヴァリエ級）を授与された。

生島と桑原の来歴はそれぞれ教養部、人文研の項に譲るとして、両者の仏文科での授業風景について、多少長くなるが同じく西川長夫の記述から引用しておく。まずは生島について。「生島先生の「研究」の時間はいつも十時十五分に始まるのだが、終礼の十二時を過ぎ、先生が机の上のテキストや資料の山を風呂敷に収められてからが長かった。十二時半を過ぎて終わらないことが幾度もあり、時には授業のあと学友会館で昼食をごちそうになり、そこでまたスタンダール論やフロベール論が続く。毎時間、数枚のプリントが出て小説の梗概、テキストや研究書からの抜粋がタイプされていたが、そんな地味でオーソドックスな講義のなかに、いつも一つか二つ先生の独自の解釈がひそかに用意されていて、知的なスリルに満ちた授業であった。」そして桑原について。「桑原先生の授業は全く独特で型破りなものだった。毎年私のノートは多くて五、六ペー

ジ、時には最初の一ページで中断してしまう。それも記されているのは内藤湖南、コーサンビ、人口統計学、象の鼻は長い、等々といった断片的で一見、脈絡のない単語や記号のようなものばかり。先生は時事的な話題やその時々先生の関心事から講義を始められることが多かった。そして先生の関心事はわれわれの関心事でもあったから、先生の話に引き込まれているうちにノートを取ることを忘れ、あっという間に時間が経つ。その時々言葉のアクセントと先生の表情、蝶ネクタイの両端を引っ張る先生の手つき、その一瞬一瞬に意味があり、その一瞬一瞬が勝負であった。生島先生の授業にはきれいな女子学生の出席が多く、なんとなく華やいだ雰囲気があったが、桑原先生の授業には、隙があればなんとか噛みついてやろうと待ち構えているような猛者が多く、他の教室にはみられない熱気と緊迫感があった。そんな中でルソーが語られフランス革命とナショナリズムが語られ、フランス批評誌が語られた。日本史その他、他専攻からの出席が多かったのもこの時間の特色であったと思う。」(西川長夫「桑原先生と戦後世代」、『桑原武夫集9』、「月報」、p. 7)

この時代の京都大学文学部仏文科のもう一つ大きなトピックとして、専任外国人教師の招聘が挙げられる。1959年に、ジュヌヴィエーヴ・フォンチエ (Geneviève Fontier) が招かれ、学生の指導に当たった。これを皮切りに、ド・ラ・ムッセ (De la Mousset)、ブーリエ・フレシネ (Beulier Frecynet)、マルグリット・ヴィエ (Marguerite Vie)、ジャックリーヌ・ジョジョン (Jacqueline Geogon)、アニー・プチ (Annie Petit)、ピエール・ドヴォー (Pierre Devaux)、ジャン＝ポール・オノレ (Jean-Paul Honore) ジャン＝マルク・サラール (Jean-Marc Sarale)、オリヴィエ・ロリヤール (Olivier Lorrillard)、エリック・アヴォカ (Eric Avocat) と続き、2017年3月現在ギョーム・ペリエ (Gillaume Perrier) が教鞭をとっている。最近は各講師とも修士論文指導と審査、フランス政府給費留学試験のための特別授業、会話や作文といった語学運用能力の訓練などを担当し、ますますその比重を増している。

1-3. 1970-1980年代：さらなる発展—本城、中川、廣田

わが国の学生運動は1960年代後半に活発化し、次第に政治問題のみならず各大学の学内問題を直接の契機として展開されるようになっていったが、1968(昭和43)年から翌年にかけて全国の大学を大学紛争の嵐に巻き込むに至った。そこでは旧来の大学のあり方が学生の立場から問い直され、さまざまな改革要求が大学当局に突きつけられた。京都大学では紛争は1969年1月に学生寮問題を契機として全学に拡大した。文学部も当然、紛争の場となることを免れなかった。1969年の学友会の無期限ストおよび同年の「L共闘」の学生たちによる文学部本館、東館の閉鎖等に始まり、ストライキや建物の占拠は1970年代を通して続いた。こうした時代背景において、京都大学全学で従来の制度の抜本的な見直しが行われることになる。大学闘争当時仏文科は「隆盛をきわめ」ていたと宮下志朗は語っている。東京大学に於いては、「大学院の競争率も6倍とか7倍とか噂されて、入るだけでもひと苦勞だった」という(「大学院の同期生として(吉田城先生追悼特別号)」、『仏文研究(2006)』、p. 322)。フランス語学・フランス文学科が長い間の念願であった第二講座を増設したのも、大学紛争中に指摘されていた大学院の改革、拡充の動

きの一環としてであった（増設は1980年）。

こうした1970年代から80年代に仏文科の中心となったのは、本城格（1916-1990）、中川久定（ひさやす、1931-2017）の二人の教授であった。伊吹退官後の1964年から1969年まで、教養部に所属していた生島が文学部の教授に就き、生島が退いた後は本城がそのポストを受け継いだ。そして1971年、当時名古屋大学教養部助教授であった中川が京都大学文学部助教授に転じて、新しい講義体制が整備された。本城は三重出身、京都大学大学院の特選給費学生を命じられ、第三高等学校講師（1943）、応召、復員（1943-1945）を経て京都大学文学部講師（1946-1947）、第三高等学校教授（1948-1949）、京都大学吉田分校助教授（1950-1957）のち1957年より京都大学文学部助教授を勤めていた。ロンサルなどフランス16世紀文学が専門であったが、その他17世紀の古典文学、さらには現代批評なども積極的に取り上げて、学生の多様な好奇心に対応した。本城が仏文科の教授であった頃、『仏文研究』の発刊がスタートした（1975年）。前身は『フランスシア』であり、伊吹が教授であった時代、院生の研究発表の場として1958年に創刊したのだが、1967年をもって廃刊しており、それを新たに再始動させたのである。『仏文研究』は、現在に至るまで京大の仏文関係者にとって重要な発表の場であり続けている。本城は1973年から1976年まで日本フランス語・フランス文学会関西支部長をつとめ、1976年にはフランス政府より教育功労勲章オフィシエ賞を受賞、また1978年から1979年まで日本フランス語・フランス文学会の副会長をつとめた。

中川は東京に生まれ、1954年京都大学仏文科卒、1956年同大学院文学研究科修士課程を修了、同年博士課程進学の後、名古屋大学助教授を経て、1971年京都大学文学部助教授、1980年同教授に就任した。専門は18世紀フランスの文学と思想、とりわけディドロおよびルソーの研究であるが、関心は哲学、政治思想、小説、演劇、紀行文など広い分野に及び、厳密なテキスト批評と実証的調査に基づいた正統的な研究方法に加えて、精神分析、歴史学、比較文学、構造分析など新しい学問手法を積極的に取り入れて、規模の大きい研究の数々を国内外で発表し、国際舞台で長期にわたり活躍した。幾多ある著作の中でも、とりわけ「Des lumières et du comparatisme」（PUF, 1992）は非常に高く評価されている。研究、翻訳、辞書編纂、校訂など多岐にわたる分野で中川は主導的な役割を果たしてきた。学外、国外との交流にも積極的で、パリ第3、第7大学の客員教授として招聘されたほか、数度にわたる国内・国際シンポジウムを立案企画して実行したことも特筆すべきである。その功績が称えられ、1967年に辰野賞（日本フランス語フランス文学会）、1985年パルム・アカデミック勲章オフィシエ級（フランス共和国）、平成5年京都新聞文化賞など数々の栄誉を受賞している。2017年6月、惜しまれつつ肺炎で死去。

1980年にフランス語学・フランス文学科第二講座が増設されたことは前述の通りであるが、それに伴い1990年までに教授陣が整えられた。1980年に本城は定年退官し、中川が第1講座教授に昇任する。第1講座助教授として廣田昌義を迎えた。廣田は1938年東京生まれ。東大を卒業し、一橋大学講師、同助教授を経て京大に迎えられた。パスカルを中心としたジャンセニズム思想を主たる研究対象とし、授業では17世紀文学の他にモンテーニュ『エッセー』の演習を継続して担当した。パスカルをはじめとした多くの翻訳の功績がある。1982年には、教養部助教授

吉田城が第2講座助教授に転じた。1984年に廣田が教授に昇任し、1990年、当時助手をつとめていた田口紀子が第1講座助教授に据えられ、ここに2講座4名の教授陣が揃うことになった。これに加えて、教養部教授の鈴木昭一郎、大橋保夫、山田稔、山本淳一、三好郁朗、松島征、同助教授の東郷雄二、稲垣直樹、多賀茂、大木充らが授業担当を行い、フランス語学・フランス文学講座はかつて見ないほどの充実ぶりを示すことになった。

1-4. 1990年代 - 現在：仏文科の現体制まで - 吉田、田口、吉川、増田、永盛

1991年、文部科学省は2000年までに大学院定員を倍増させ、研究者を養成する機関を充実させる、いわゆる大学院重点化を発表した。これに伴い、1990年代を通して、現在に至る大学の枠組みが準備された。教養部が人間環境学研究所、総合人間学部へと改組されたことはこの一環として見るができる。これまで見てきた通り、従来文学部は教養部フランス語教室とかなり密接に関わっていたのだが、枠組みの変更により組織の独立が強まり、東郷雄二は「教養部が平成5年に総合人間学部へ改組されると、それまでよりは文学部との関係が薄く」なると述べている（「吉田城さんの思い出（吉田城先生追悼特別号）」、『仏文研究（2006）』、p. 367）。さて、京都大学文学部においても、1992年文学部再編計画委員会が設置され、文学部における人事運用の柔軟性を高め、また財政危機を脱することを主たる目標として、文学部の教育研究体制の大規模な再編が始まった。『京都大学文学部の現状と課題 自己点検・評価報告書』を含む数冊の報告書が提出されたのち、1995年4月より、従来哲学科・史学科・文学科・文化行動学科の4学科44講座であったものが、人文学科1学科16大講座（実験講座10、非実験講座6）へと改編された。これによりフランス語・フランス文学講座はヨーロッパ・アメリカ語学・ヨーロッパ・アメリカ文学講座へと統合され、西洋文献文化学系フランス語学フランス文学専修という形で存続することになった。

さて、大講座化を踏まえ文学部でも引き続き大学院重点化が進められるが、この過程で表面化したのが人文科学研究所との関係である。1962（昭和37）年から「自然科学系の大学院拡充の必要性」を掲げ附置研究所教官の大学院に対する協力体制の整備が文部省によって始められたが、この動向に対し文学部教授会は、大学自治の観点から憂慮を示し、平沢総長に意見書を提出した。にもかかわらず、1968年には、文学研究科にも附置研究所による大学院拡充がはかられた。具体的には、人文科学研究所の講座に博士・修士の定員を付け、それを文学研究科の各講座に貼り付けるものであった。しかし京都大学事務当局は、先の文学部からの意見書に鑑み、このことを文学部に通知しなかった。その後も、人文科学研究所に新しい講座が新設されたときには、文部省からそれに対応する大学院定員が増員されたが、それもまた文学部に伝えられることはなかった。こうした取り扱いが、大学院重点化を進めるなかで解決すべき問題として浮上し、1993年10月に文学部は人文科学研究所に協力要請をし、12月には人文科学研究所はその要請を受け入れた。その後、人文科学研究所の教員の大学院文学研究科協力講座への参加者、大学院生との関係、教授会運営等について両者で話し合いが繰り返され、最終的には1996年5月に「文学研究科協力講座の発足にあたっての文学研究科長・人文科学研究所長の基礎的取り決め」が両者に

よって調印された。結果、人文科学研究所からは17名の教官が協力講座として参加することになり、フランス語学フランス文学専修には、人文科学研究所宇佐美齊教授、大浦康介助教授（2004年4月より同教授）が教育指導に加わるようになった。1996年より、前年の大講座化を踏まえた大学院重点化がなされた。大学院重点化の研究教育組織は、大講座制の枠組みを基本的には引き継ぎつつ（ヨーロッパ・アメリカ語学・ヨーロッパ・アメリカ文学講座は欧米語学欧米文学講座と改称）、新たに大講座の上位に専攻を置いた。これにより、欧米語学欧米文学講座は文献文学専攻の下位区分となった。同年、代々学部学生や大学院学生の研究指導と相談に応じてきた助手の制度が廃止になった。また、2004年より京都大学は国立大学法人となったが、それに伴い、2003年度を基準として毎年1%の効率化係数が人件費、物件費にかけられることになった。これは文学研究科に単純に当てはめれば、教員1名の削減を毎年行わなければならないことになり、これまでの文学研究科の教育研究体制を大きく揺るがしかねない。

このように制度面で大きな変化のあった1990年代以降であったが、この激動の時代に、先に取り上げた中川、廣田までの教授以外で助教授あるいは教授職を務めた、あるいは務めている人物を以下に列举する。中川は文学部評議員を経て1992年度より2年間文学部長を務め、1994年定年退官する。その後を受けて、同年吉田が第1講座の教授に昇任した。1995年、一橋大学助教授の増田眞が助教授に迎えられた。また、廣田は2001年に退官し、同年田口が教授に就任、2002年京都教育大学助教授の永盛克哉が助教授に迎えられた。2005年6月、意欲的に研究活動が続けていた吉田が急逝する。その後を受け2006年、首都大学教授であった吉川一義を教授に迎える。吉川は2013年に定年退官、2012年度より増田が教授に任ぜられ現在に至っている。

吉田城（1950-2005）は英文学者、吉田正俊の子として東京に生まれる。都立日比谷高を経て京都大学文学部仏文科卒、東京大学人文科学研究科仏文専攻博士課程中退。大阪大学言語文化部講師、助教授、京大教養部助教授を経て文学部助教授となる。京大に通ったのは、当時学園紛争の煽りを受け、東大の大学入試が中止されてしまったためであった（宮下志朗「大学院の同期生として（吉田城先生追悼特別号）」、上掲書、p. 322）。学生時代より伝説的な秀才で、京大の大学院入試に落第するのだが、それは日本語で書く問題であるところをフランス語で書いたからであるという（小倉孝誠「吉田城さんを偲んで（吉田城先生追悼特別号）」、上掲書、p. 348）。1975年フランス政府給費留学生としてパリに赴き、1978年パリ第四大学に提出された博士論文は、現在でも基本文献の一つとなっている。吉田はプルースト作品の生成研究で知られ、ガリマール社刊行プレイヤッド叢書に収録される『失われた時を求めて』の校訂・編集に参加し、国際的に高い評価を得た。同叢書に日本人が参画するのは初めてのことであった。1991年にはパルム・アカデミック勲章シュバリエ級を授与される。プルースト研究以外にも持病との闘いと並行して辞書編纂などを行い、その仕事ぶりに接した多くの者に「超人的」と言わしめるほどであった（上掲書参照）。2003年にはプルーストに関する国際シンポジウムを京都大学で開催（「境界なきプルースト」）するなど、日仏交流の推進にも積極的であった。このように精力的に活動していた吉田であったが2005年、容態が急変し急逝、その死は国内外の多くの研究者たちによって惜しまれた。吉田がいかに優秀であり、そのスマートでありながら親しみやすい人柄がいかに慕われ

ていたかということは、2006年に編まれた『仏文研究』の「吉田城先生追悼特別号」によく表れている。学内外、国内外、名誉教授から在学中の学生まで、多くが早すぎる死に深い哀悼の念を表した。

吉田の死後、首都大学教授である吉川一義が京都大学教授として迎えられた。吉川は吉田とは古い知己であり、二人はパリにおいて優秀なプルースティアンとして語り継がれていたという(上掲書参照)。吉川は1948年フランス生まれ。1970年東京大学文学部フランス文学科を卒業、同年6月に同大学大学院人文科学研究科修士課程(仏語仏文学専攻)に進学、1972年3月に修了、同年4月同博士課程(仏語仏文学専攻)に進学した。博士課程在学中の1973年10月にパリ・ソルボンヌ大学に留学し、1977年1月に同大学博士号を取得。帰国後同年3月に東京大学大学院人文科学研究科博士課程を中退、4月より同大学文学部助手に採用された。1978年4月より東京女子大学文理学部専任講師として採用され、1981年4月同助教授に昇任。1988年3月に退職、同年4月に東京都立大学人文学部助教授に就任。1993年4月に同教授に昇任し、2005年に首都大学東京教授となる。2006年3月に辞職、同名誉教授となり、同年4月に京都大学大学院文学研究科教授に就任した。本項目の記述は、京都大学のホームページを参考にした(2016年11月17日閲覧。http://www.kyoto-u.ac.jp/static/ja/news_data/h/h1/news7/2011/120312_1.htm)。吉川は、吉田と同じくマルセル・ブルーストを研究の対象とし、そのフランス語博士論文「未発表草稿帳に基づく『囚われの女』成立過程の研究」(パリ第4大学、1977年)は、作品の生成研究に新たな知見をもたらした。また、多数のヨーロッパ絵画が『失われた時を求めて』に登場し、作品構成の要をなしていることに着目して、この作品の創造において絵画が果たした役割を文献・画像両面での徹底的な資料調査を通じて解明した。作品中で言及ないし暗示される画家とその作品の多くを同定し、その成果を踏まえて、小説に登場する絵画作品の提示の仕方の多様性が、小説の構成とメッセージにとって持つ意味、芸術に対する偶像崇拜的態度と真の芸術創造との関係、小説に登場する架空の画家エルスチールとその画業が作品において果たす役割、について多くの創見を提起し、ブルースト研究ばかりでなく、文学と絵画の相互交渉の研究に斬新な展望を開いた。これらの研究は、『ブルースト美術館』(筑摩書房、1998年)、『ブルーストと絵画』(岩波書店、2008年)、そして*Proust et l'art pictural* (『ブルーストと絵画芸術』) (Paris, H. Champion, 2010)などの著作に結実している。吉川の業績は、日本人によるフランス文学研究の金字塔ともいべき成果で、フランス本国でも高い評価を受けている。前記博士論文は多くの校訂版や研究書に引用され、仏語での著作*Proust et l'art pictural*には「ル・モンド」などの書評で高い評価が与えられた。これらの業績に対して、2010年5月にはフランス政府より教育功労章(Palmes académiques)オフィシエ級が授与、同年6月にはアカデミー・フランセーズ(フランス学士院)から学術大賞フランス語フランス文学顕揚賞(Prix du Rayonnement de la langue et de la littérature françaises)が授与、2011年11月には前記*Proust et l'art pictural*によりカブール＝バルベック・ブルースト文学サークルから文学賞(Madeleine d'Or)が授与されている。吉川は日本フランス語フランス文学会の会長を務めたのち2013年に京都大学を退官、現在『失われた時を求めて』(岩波文庫、全14巻、既刊3巻)の個人全訳に取り組んでおり、ブルースト作品の

日本における受容にも多大な貢献をしている。

本部の最後に、2017年7月現在仏文研究室で教鞭をとり精力的に研究活動に勤しむ教授陣を挙げておく。田口紀子（1953-）は京都大学大学院文学研究科博士課程研究指導認定退学。パリ第4大学文学博士。京都大学文学部助手を経て1990年同大学助教授に就任。研究領域に関しては、フランス語学からテキスト言語学の領域へと関心を広め、特に小説を対象にしたフィクション論を研究テーマにしている。増田眞（1957-）はルソーやディドロを中心とした18世紀の文学・思想を専門とし、特にルソーにおける言語論と政治思想を研究テーマにしている。永盛克哉（1964-）は17世紀演劇を専門とし、特に古典悲劇の理論を研究テーマにしている。

2. 人間環境学研究科・総合人間学部

本稿では、第三高等学校、京都大学教養部、京都大学総合人間学部という流れを追う。京都大学におけるフランス研究を考える上で、この3つの場は文学部仏文科に勝るとも劣らない大きな役割を担った。第三高等学校は、京都帝国大学とは強いつながりを持っていたものの、別組織であった。このことが、教養部と文学部という京都大学におけるフランス学の二つの場の誕生に関わることとなる。しかしながら研究領域が重複していることも事実であって、この二つの場の人的交流は現在に至るまで盛んである。以下では第三高等学校創立から現在にいたる流れを概観する。

2-1. 第三高等学校

1897年、西園寺公望の発議によって京都帝国大学が創立された。従来帝国大学とは独立に発展してきた第三高等学校であるが、ここに大学予科としての性質を得ることになる。1897年以前の第三高等学校は法・医・工の専門教育を旨としていたのであるが、以降様々な学科が設立されることになる。しかし、フランス語科の設立は東京の第一高等学校に比べてかなり遅れた1910年を待たなくてはならなかった。のちの三高文科、文甲：英語、文乙：ドイツ語、文丙：フランス語という学級編成の基礎はこの時成立した。1910年12月の職員構成（『神陵史』p. 496-498）にはフランス語の教授として松井知時の記載があり、この人物を京都大学におけるフランス語学の始まりに位置付けることができると思われる。松井知時は『仏語の発音及文法』（1916）や辞書、教科書をものしている。黎明期の文丙科の教授には、他に英語科の教授である島文治郎が当たったとの記載がある（上掲書p. 530-531）。時代が下って1916年には、折竹錫が仏語教授として記載されている。（上掲書p. 580）。

さて、直接にフランス研究とは無関係なものの、学制改革の流れを概観するため、1918年の高等学校令について触れておいて良いだろう。この発令によって、三高の役割は公式には大学予科としてのものではなく、独立した高等科としてのものになる。京都帝国大学との強いつながりは依然として維持されたものの、従来の大学の単なる付属機関を超えた独立した主体として、高

等学校は学制上の地位に関して一つの前進を遂げたのである。当該時期に起こった三高の一大事件として金子校長排斥事件がある。金子銓太郎校長は、1919年に三高校長に就任した。校長は就任数年を機に、生徒の取り締まりの強化を行い、また新陳代謝の名目のもと7人の教授の入れ替えを行った。これに反発し、従来の「自由の学風」を守ろうと団結した三高生徒が、校長排撃のデモを行ったのである。全校卒業生述べ1000人あまりを巻き込んだこの騒動は、ついには1922年8月、金子校長の静岡高等学校転任をもって解決する。ほとんど学生側の完全勝利であった。金子校長によりフランス文学の松井知時が河野与一と交代している。松井教授に関してはあまり情報がないが、生徒の怒りの一因には転任した教授たちに対する共感があったというから、教授が生徒に支持されていたということは間違いないと思われる。他に、学生との良好な師弟関係をうかがわせるエピソードを当時の学生の一人が語っている。松井教授に世話になった生徒の一人が銀行員となり、金子校長の整理以降不遇を困っていた教授が台湾にフランス語教室を開くための資金集めをしたと言うのである（『神陵史』p. 608）。松井知時と交代で教授となった河野与一は多言語に精通する碩学で、入学年度から河野与一に学んだ桑原武夫は河野の手腕を「見事な成功だった」とまとめている（『河野学派の落第生』、『桑原武夫集4』、朝日新聞社刊、p. 506）。余談だが、この後桑原は河野に請われ東北大学へと就職し、のちに人文学研究所で行われることになる共同研究のアイデアがそこで胚胎するのである。

この、大正（1912-1926）から昭和（1926-1989）に移り変わる時期の三高は、文芸黄金期と言われるほど作家や文人を輩出していた時期であり、山口誓子や梶井基次郎、三好達治といった文人が三高から出た。フランス学という分野においても、桑原を筆頭に優秀な人物を多数輩出した。以下に主要な人物及びその在学年度を列举する。伊吹武彦（19-20世紀フランス文学、1919-1922在学）、河盛好蔵（ヴァレリー、ボードレールなど）、杉捷夫（フランス文芸批評）、水野亮（バルザックの研究・翻訳）はともに1920-1923在学、淀野隆三（ブルーストの日本紹介、シュルレアリスム、社会主義文学）及び桑原武夫（アラン、スタンダールなどの訳業、文芸・時事評論、共同研究の主催）は1922-25在学である。淀野は文芸同人誌『青空』のまとめ役をしており、同誌は梶井基次郎らの文学修行の場となった（『神陵史』p. 712）。

大正期は日本において社会主義運動が燃え上がる一時期であり、そして昭和期には日本は対戦へと突入していく。1930年には三高自由寮にて500人あまりが関わるストライキが決行され、除名者26人を含む大量の処罰者を出して終結する。左翼色は無かったとの当事者の弁があるものの（上掲書p. 789）、発端には寮生と特高警察との衝突や、左翼思想の広まりに対する警戒があったのであり、時代状況とは無縁ではなかった（上掲書p. 769）。この頃の文芸活動は、三高の文芸誌である「獄水会雑誌」の他に二つの同人誌において行われ、それらには織田作之助や、後に京大仏文科に進学することになる野間宏らが関わっていた。教授に関しては、土井虎賀寿や鈴木成高らの京大を出た若い講師たちが講義を行い、学生たちに感銘を与えた（上掲書p. 863）。

1936年の二・二六事件を境に日本は急速に軍国化していく。こうした暗い時代背景にあって、三高生たちは内面の自己形成のため、ドイツ観念論やフランスのモラリズム文学に耽溺する。のちの仏文学者である谷長茂は、寮歌「沫雪ながれ」を作詞したが、以前のものと異なる歌の中に

は以前の明るい時代に対する愛惜が表されているという（上掲書 p. 873）。1930年代後半には文系学部が縮小されるという事態が起こり、文4、理4だったものが、1945年には文3、理8にまで理系偏重が押し進められた。また、1943年には従来3年だった修業年次が2年に短縮される。この頃の教育者の発言には、中川立命館大学総長の「外国語教育の削減を徹底的に行い、従来の各国語を一つに整理、敵国語を追放し、重点教育とすれば、教授時間の不足は解消すると思う」といった機会主義的な暴論もあったが、一方で河盛好蔵立教大学教授の「外国語の時間を減らすことが、其のまま日本精神の作興であるとするが如き近視眼的な措置は、厳に戒めてもらいたい」という発言のように真摯な態度も見られた（上掲書 p. 894-895）。軍部の教育への介入はますます進み、1942年には居丈高な将校に対して腹に据えかねた三高生が将校を殴打するという事件が起こった。多くの学生が労働に動員されたが、伊吹武彦らの講義が彼らにとっては慰めであったという（上掲書 p. 919）。

1945年の敗戦を機に、三高は戦時中の異常な組織編成から従来通りのそれへ、新たな変革が急務となる。文理の学生数不均衡の是正の試みが採られ、また1946年より2年の修業年限が3年に戻される。1946年には、戦時中に三高の伝統を堅持しようと尽力した前田校長の後任として、京都大学教授でフランス文学者の落合太郎が選任される。落合は、三高校長の職務について、「この務めだけは、任にたえられるかぎり、わたしとしては一日も長く続けたかった。生徒は優秀で、すべてに物わかりがよく、というのは論理的で、筋道の正しいことにはことごとく従順だった」と述べている（桑原武夫、生島遼一編『落合太郎著作集』p. 486）。戦争が終わり、生徒による活動も復活し、文芸雑誌「獄水」では後のフランス文学者栗津則雄が健筆をふるった。戦後の物資窮乏の中で「獄水」出版は困難を極めたが、当時の指導的文芸雑誌「世界文学」の中心的メンバーであった伊吹武彦の助けにより、用紙難が解消されるということがあったという（『神陵史』p. 963）。

三高にとって戦後は、戦中から平時への移行の時であったと同時に、その終焉へと向かう道でもあった。官立の高等学校、帝国大学は、学閥の解体を目指すGHQの標的となったのである。当時の落合校長の努力むなしく、三高は1947年までには京大へと併合されることが決まっていた。1948年には正式に新制京都大学創設に対し協力していくことが教授会にて可決される。1949年三高は不可避免的に事実上解体され、京都大学の下部組織、「分校」の地位に甘んじることになる。当年には学生は3年生だけとなり、三高の消滅は翌年の1950年であった。

2-2. 教養部

2-2-1. 三高から京都大学吉田分校へ

前節で触れた通り、三高は教養部へと統合される。そもそも第三高等学校は、京都大学の予科としての性質を持っており、現代の制度とは異なり三高から京大へは特別な入学試験は課されなかった。その大学予科としての性質が、教養部というシステムとして残されたと言ってよい。そしてその後、教養部は人間・環境学研究科、総合人間学部に発展的解消される。こうした複雑な経緯を理解するため、教養部の沿革を述べつつ、各時代を彩った教員たちについて述べていく

い。

三高の解体への道筋は、三高の教育期間としての自律性を残そうとする三高側の要求が、大学及び政府側の要望とぶつかる過程であった。1948 年ごろにはすでに、新制の計画は主に京大事務局の手で立案運営される傾向が強くなっていた（『京都大学百年史』p. 615）。1949 年の抜き打ち的な国立学校設置法の成立によって、三高は京都大学の付属機関（京都大学第三高等学校）となり、1950 年その最後の 414 名を送り出すと、三高は 80 余年にわたるその歴史に幕を降ろすのである。新制大学には、専門科目の他に一般教養科目が設けられた。この一般教養科目の授業に旧三高の校舎が使われ、学内及び学外から補充された京都大学の教官が授業に当たった。これが京都大学分校であり、国立学校設置法施工規則第 4 条「教授上または管理上必要がある場合には国立大学又は国立大学の学部に分校を置くことができる」に拠ったものである。分校設置時点の教授数は、教授 17 名（文科系 11、理科系 6）、助教授 28 名（文 18、理 10）、講師 4 名（文 2、理 2）、助手 5 名（体育 2、理 3）の総計 54 名（文 31、理 21、体育 2）であった。旧第三高等学校の教官は、1949 年に約半数が京都大学分校教官として配置換えになり、その他はあと 1 年で卒業を待つ 3 年生のために三高にとどまった。フランス語教員でいうと、伊吹武彦が前者、生島遼一、本城格が後者の例になる。

伊吹、本城については文学部の項で詳述したので、ここでは生島遼一について述べておく（柿谷浩一編「年譜」、生島遼一『春夏秋冬』、講談社文芸文庫、2003 年、pp. 234-243 参照）。生島は、1904 年大阪生まれ。1922 年旧制松江高等学校に入学。西洋哲学を志し、ドイツ語クラスに入る。1923 年から独学でフランス語を学ぶ。1925 年京都大学文学部哲学科に入学するも、ドイツ語が思うように上達しないことから、文学部への転科希望を出す。翌年文学部文学科フランス文学専攻に転科し、太宰施門、落合太郎の指導を受ける。上級生には河盛好蔵、桑原武夫らがいた。落合太郎の、外国語を読むことの難しさ、テキストを正確に読むためには翻訳の仕事をするのが良いという教えが生涯に渡り強い影響を与えた。のちに、同時期に活躍する桑原武夫、伊吹武彦とともに「京大仏文の三羽ガラス」と称され存在感を示す。1929 年、京都大学文学部を卒業。落合太郎の推薦で神戸商業大学予科の講師となり、フランス語を教える。同じアパートには学友であった吉村正一郎らがいた。1933 年、桑原武夫との共訳であるスタンダールの『赤と黒』を刊行する。斡旋したのは落合であったという。1947 年、戦後の虚脱感や精神的疲労などから神戸商科大学を退職するが、当時三高の校長であった落合の誘いを受けて第三高等学校の教授に就任する。1949 年、京都大学文学部吉田分校（のちの教養部）フランス文学教室の教授に就任。同僚に本城格らがいた。同年太宰の退官に伴い文学部でも授業を担当し始める。1953 年、ボーヴォワール『第二の性』の翻訳刊行が始まり、日本でもベストセラーになる。1964 年に文学部フランス文学講座の教授に就任し、1968 年の定年退官までこの職を務める。1968 年から 1973 年までは関西学院大学の教授を務める。1981 年には日本芸術院賞、1988 年には京都府文化賞（特別功労賞）を受賞。1991 年の胃がんによる死去まで精力的に執筆活動を行う。翻訳にスタンダール、ボーヴォワールのほかジッドやヴァレリー、サルトルなどがあり、日本におけるフランス文学受容に多大な貢献をした一人である。

他に最初期に教養部フランス語教室の教員となった者に、田中俊一、渡辺明正、後藤敏雄がいた。田中は19世紀文学の専門家で、とりわけプレロマン派の研究で知られる。デュマ・フィス『椿姫』の翻訳がある。1930年京都帝国大学文学部を卒業のち、関西学院大学予科教授、同大学法文学部専任講師、同大学文学部助教授を経て、1950年京都大学助教授（分校勤務）となる。同30年教授（教養部）に昇任、1968年停年により退官。この間、1964年から同1966年まで京都大学評議員として大学の管理運営に貢献。京都大学退官後は、1968年から1974年まで京都産業大学教授として後進の指導にあたる。1975年勲三等瑞宝章を授与された。1992年死去（『京大広報 No. 439』、p. 462）。渡辺は1912年生まれ。1935年東京帝国大学仏文科卒。同大学院を卒業後、財団法人国際文化振興会勤務、在ハノイ総領事館勤務、日本大学予科教授を経て、1949年京都大学分校助教授に就任。1963年同教授。1976年に定年退官のち成城大学に転出。フランス16-17世紀の文学を専門とし、バロック文学研究の先鞭をつけた。また、時代を問わず多数の優れた翻訳によっても知られている。他に、伊吹武彦らとともに白水社刊『仏和大辞典』の編集にも携わった。1975年フランス政府よりパルム・アカデミック勲章（オフィシエ級）授与。2007年死去（『京大広報 No. 630』p. 2534）。後藤敏雄は1915年愛知県生まれ。1940年京都帝国大学を卒業し、関西大学法文学部講師を経て1950年京都大学教養部助教授、1965年同教授。1979年退官、京都女子大学に移る。ユゴーを中心とするフランス・ロマン派の研究が専門であり、渡辺と同じく『仏和大辞典』の編集に関わった。1992年死去（『京大広報 No. 429』p. 323）。1949年入学の、のちの教養部教授山田稔は、学友で、のちの仏文科教授中川久定とともに、当時の仏文科の授業を受けたことを回想している（山田稔「はじめての訪問－後藤敏雄先生を偲ぶ」、『仏文研究（23）』1992年、p. 206）。それによると、1949年当時、学制改革の混乱もあり9月始まりの授業では、伊吹が文法、練習問題などを後藤、購読を渡辺が担当していたという。

2-2-2. 1950-1960年代：吉田分校から教養部へ

吉田分校から教養部への移行は、1950-1960年代を通じてなされた。吉田分校誕生後、新制大学への移行に伴って、既に困難を呈していた学生収容のために、旧三高校舎以外の校舎の増設が検討された。そこで選ばれたのが京都府宇治郡東宇治町五ヶ庄の旧陸軍火薬廠の敷地（火薬製造工場および火薬貯蔵庫）であった。京都大学はこの敷地を借用し、原則的に1年生が宇治の分校を、2年生が吉田分校で授業を受けた。しかし遠隔地に分校があるという事態は、学生教員両者に負担を強いた。1954年、工学部教授西原利夫が分校の4代目主事に就任し、西原の主導のもと分校は教養部に、分校主事は教育部長へと改称された。これに伴い分校制度は廃止され、教養部は形式上、他学部と同等の扱いを受けることになった。ただしこれは京都大学の学内措置に過ぎず、文部省の制度としては京都大学分校という位置付けであった。このため主事を置く必要があり、1955年5月以前は教養部部长と主事が併置されていたのだが、同月以降は教養部部长が主事を兼任するという形になった。また、前述の宇治、吉田分校の併存に伴う不都合の解消のため、1957年には分校統合理由書が文部省に提出され、吉田分校の増築が完了した1961年に宇治分校は吉田分校に廃統合された。分校制度自体が廃止されるのは1963年で、この年に京都、九州、名古屋、

大阪の4大学の教養部制が認められた。

この時代、1970年までに教養部の助教授または教授に就任した人物のうち、先述していないものを列挙すると、林憲一郎、生田耕作、大橋保夫、鈴木昭一郎、山田稔、山本淳一がいる。

林は1913年兵庫県生まれ。1938年京都帝国大学仏文科を卒業、京都大学副手、講師を経て1954年より同教養部助教授。1964年より同教授。1976年に退官し、同年から1984年まで京都産業大学の教授を務めた。モリエールを中心とするフランス古典喜劇の比較文学的研究を専門とし、主に古典時代の文学を研究対象とした。他に比較文学研究の帰結として、日本文学、文化の欧米への紹介に努めた。1976年勲三等旭日章を受ける（『京大広報 No. 583』p. 1564）。

生田は1924年京都生まれ。1950年京都大学文学部文学科（フランス語フランス文学専攻）を卒業、関西学院短期大学講師を経て、1951年京都大学講師（吉田分校）に就任、フランス語の講義を担当した。1956年教養部助教授、1969年同教授に就任、1980年に退官。専門はフランスの現代文学で、アンドレ・ブルトン、セリヌ、マンディアルグ、バタイユら異端の作家たちの、犯罪、魔術やデカダンスを主題にした芸術性の高い作品を積極的に翻訳、研究し、後続に大きな影響を与えた（『京大広報 No. 475』p. 865）。生田は、のちに鴨川改修工事に反対しそれを取り下げさせるなど反骨の人であったが、それを象徴するのが京大退官のきっかけにもなったバイロスの画集事件である。1979年、神奈川県警が『バイロス画集』を猥雑図画の疑いで押収、翻訳、編集を担当した生田も取り調べを受けることになった。結局裁判のち勝訴するのだが、裁判によって授業に滞りが出るのを案じ退官、その後は執筆活動に専念する。1994年没（『20世紀日本人名辞典』）。

大橋は1929年京都生まれ。1953年京都大学文学部文学科を卒業後、京都大学文学部助手、教養部講師を経て1959年に助教授に就任。1973年教授。1992年総合人間学部配置換えとなり、1993年定年により退官。その研究領域は幅広く、一般言語学、フランス語学（文法基礎理論等）、フランス語教育法、フランス文学、フランス現代思想さらにはマルコ・ポーロ研究など多岐にわたっている。『仏和大辞典』（伊吹武彦他と共編）の編纂にも関わった。訳業の中では、レヴィ＝ストロース著『野生の思考』の翻訳（みすず書房刊）は名訳として知られる。1975年フランス政府からパルム・アカデミック勲章シュヴァリエ級を授与される。1998年死去（『京大広報 No. 530』p. 602）。

鈴木は1928年東京生まれ。1954年京都大学文学部文学科を卒業、1956年同大学大学院文学研究科修士課程修了後、同研究科博士課程に進学、1956年より1958年までフランス政府留学生としてパリ大学文学部に留学し、1958年博士課程退学後、同年立命館大学文学部専任講師、1961年同大学助教授を経て、1966年京都大学教養部助教授に採用され、1980年教授に昇任した。1992年退官。京都大学においては、教養部においてフランス語教育を行うかたわら教科書・文法書の編纂や教授法の改善を行った。文学部および文学研究科では、主として19世紀および20世紀のフランスの作家に関するフランス文学の講義および研究指導を行った。専門の研究においては、小説家スタンダールの美学と創作技法を初めて膨大な戯曲習作メモから解析し、この作家の崇高の概念とその表現の秘密を明らかにした。この研究は国際的に高い評価を得ている。さら

に『スタンダール研究』（1986）では、数千項目にわたる年譜の全記述について原典への遡及を可能にし、日本における年譜の通念を打破するなど、従来の作品紹介者や翻訳者の域を越えた国際的な研究を行った（『京大広報 No. 668』p. 3462）。

山田は、1930年福岡県北九州市に生まれる。1953年京都大学文学部卒業。1954年京大人文学部文学研究所助手、1965年京都大学教養部講師、助教授、教授。1994年定年退官、名誉教授の称号を辞退する。18世紀、19世紀のフランス文学の研究、翻訳のほか、小説の執筆でも知られる（『残光のなかで 山田稔作品集』、講談社文芸文庫、2004年所収の年譜参照）。

山本は、1933年大阪に生まれる。1956年京都大学文学部文学科を卒業、1958年京都大学大学院文学研究科修士課程修了、1963年同博士後期課程単位取得退学後、同年京都大学文学部助手に採用された。1965年から1968年まで立命館大学講師、助教授を経て、同年京都大学教養部助教授に採用、1984年教授に昇任、1992年総合人間学部教授に配置換えとなり、1996年退官。その後、摂南大学国際言語文化学部教授、同学部長を歴任した。山本は教養部・総合人間学部においてフランス語教育に従事するほか、文学部及び大学院文学研究科においてフランス文学の講義及び研究指導に当たり、さらに総合人間学部では文明論講座を、大学院人間・環境学研究科においては、ヨーロッパ文化・環境論講座を担当した。研究面においては、中世フランスにおけるアレグリー文学を専門分野とし、特に『地獄の夢』や『メロジス・ド・ポールレゲ』で知られる作家、ラウール・ド・ウーダンを主たる研究対象とした。また、『白水社仏和大辞典』、『小学館ロベール仏和大辞典』の編集によって日本のフランス語フランス文学の発展に寄与するとともに、フェルナン・ブローデル『物質文明・経済・資本主義 15 - 18世紀 第2部「交換のはたらき」』、ブーガンヴィル『世界周航記』など基本文献の正確な翻訳を行い、幅広いユマニスト的業績を挙げた（『京大広報 No. 639』p. 2771）。

2-2-3. 1970-1992年：教養学部から人間・環境学研究科、総合人間学部へ

教養学部の独立の教育期間としての学部化は、1960年代に検討され始め、1970年代から1980年代を通じて検討が続けられた。京都大学では従来、入学者は学部別に入学するにもかかわらず、2年次までの教育は教養部で行われていた。学部別に教育が行われるのでもなく、東京大学のように全学生が一斉に教養部に入学するのでもないこの一貫性を欠いたシステムは、教養部に独自の教育的意義を見出せないという学生教員両者のジレンマを抱えていた。このジレンマから生まれた学部化の動きは、1969年の大学紛争の時期を経てより真剣に取り上げられるようになる。1970年には、「教養課程を廃止し、一般教育と専門教育について、4年一貫教育を行う」ことが総長の諮問機関である「大学問題検討委員会」によって提案され、この答申が総長試案として公表された。1970年代、1980年代を通じてこの案に検討が加えられ、1989年には①総合人間学部の新設、②京都大学における教養過程教育の改革案、③学術総合研究所の基本構想という3項目についての具体案がまとめられた。それを受け、1991年には人間・環境学研究所が新設され、翌年1992年には総合人間学部が開設され、ここに全国の国立大学で初めて教養部の学部化が実現した。教養部の人的資源を中心に人環が組織され、それまで教養部が受け持っていた一般教養

科目は全学で運営することとなったのであるが、三好郁朗によれば、実施責任は変わらず総合人間学部が持ち、科目内容については既存のものをほとんどそのままスライドさせ、卒業の単位数も変化が無いなど、抜本的改革と言い難い側面もあったという。実際に1998年の時点で、全学共通科目の88パーセントが総合人間学部所属の教員によって運営されていたという（報告「教養教育の組織化について」、『京都大学高等教育研究 第4号』、p. 127）。

この時代に教養部に就任した助教授、教授のうちまだ挙げられていないものは以下の通りである。塩川徹也、三好郁朗、岩崎浩、東郷雄二、吉田城、石井洋二郎、稲垣直樹、松田清、松島征、多賀茂。このうち、塩川、岩崎、吉田、石井を除く全員が1992年10月をもって京都大学総合人間学部に出向している。

塩川は、1945年福岡県生まれ。1968年東京大学教養学部教養学科（フランスの文化と社会）卒業、同年東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）。1970年パリ第4大学修士課程入学、1971年同修了。同年パリ第4大学博士課程進学、1975年同博士課程修了（第3期課程博士取得〔フランス文学〕）。1976年より京都大学教養部助教授（フランス語）、1980年より東京大学文学部助教授（フランス語フランス文学）。1993年東京大学文学部教授、1995年東京大学大学院人文社会系研究科教授。2007年パリ・ソルボンヌ大学（パリ第4大学）招聘教授（アルフォンス・デュブロン講座）。2009年東京大学教授を定年退官。同年学士会会員に選ばれる。塩川は、パスカル『パンセ』を中心とする研究を行い、国内外に発表してきた。パリ第4＝ソルボンヌ大学に提出し、1977年にニゼ書店から刊行した博士論文『パスカルと奇蹟』（日本語訳は『パスカル 奇蹟と表徴』）は、フランス学士院、ヴィクトル・デルボス賞を受賞、2003年にはそれまでの研究の集大成として『パスカル考』をまとめ、これに対して2005年度の日本学士院賞が与えられた。（東京大学文学部ホームページ [http://www.lu-tokyo.ac.jp/schema/annual_report9/nenpo9.3.18futsibun.html] および日本学士院ホームページ [http://www.japan-acad.go.jp/japanese/members/1/shiokawa_tetsuya.html] 参照。2017年1月2日閲覧。）

三好は、1939年朝鮮京城府生まれ。1962年京都大学仏文科卒。1964年フランス政府給費留学生としてパリ大学に学ぶ。1967年京都産業大学講師。1970年大阪市立大学講師、のち助教授。1981年京都大学教養部助教授、1992年教授。同年総合人間学部に出向となり、1996年に学部長。1998年から1999年にかけて京都大学副学長を務め、2001年に定年退官、名誉教授。同年京都嵯峨芸術大学学長。2013年退任。19世紀、20世紀の詩、なかでもフランス象徴派、シュルレアリスムを研究対象とした。2013年フランス政府教育功労章受章。2015年秋、瑞宝中綬章受勲 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E5%A5%BD%E9%83%81%E6%9C%97> 参照。2017年1月2日閲覧）。

岩崎は1946年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。東京大学人文科学研究科仏語仏文学博士課程中退。パリ第8大学博士。1979年より京都大学教養部助教授、1982年学習院大学に出向。ブルーストを専門とする。

東郷は1951年京都府生まれ。1970年私立洛星高校卒業、京都大学工学部入学。1972年京都大学文学部に転学部のち、1975年卒業。1977年京都大学大学院文学研究科フランス語フランス文

学専攻修士課程修了、同年同博士課程進学のうち、パリ第4大学博士課程に留学、1980年同大学第3課程博士号取得（一般言語学）。同年京都大学教養部助教授。1992年京都大学総合人間学部助教授に配置換えとなり、2001年京都大学総合人間学部教授。2003年より京都大学人間・環境学研究科教授に配置換え。2017年退官、名誉教授。東郷は、機能的統語論の立場から、フランス語の語順現象に関わる統語論、とくに倒置構文・非人称構文・外置構文・受動文などを機能論的に研究していた。近年はメンタル・スペース理論にヒントを得た心的モデルである談話モデル理論の立場から、話し手と聞き手の間で展開される談話構築のストラテジーの分析を通じて、名詞句の指示と照応の問題を中心に研究している。他にフランス語教育にも力を入れており、数々の教科書や一般向け参考書のほか、仏和辞典の編纂も行なっている（京都大学大学院人間・環境学研究科 総合人間学部ホームページ [https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic_f/faculty_f/151_togo_y_0/] 参照。2017年1月3日閲覧）。

吉田に関しては、文学部の項に詳述したので、そちらを参照されたい。

石井は1951年、東京都生まれ。1970年東京教育大学附属駒場高等学校卒業、1975年東京大学法学部卒業、1978年パリ第4大学修士課程修了、1980年東京大学大学院人文科学研究科修士課程終了。1982年京都大学教養部助教授、1987年東京大学教養学部助教授、1994年同大学教授、2007年駒場図書館長、2010年東京大学大学院総合文化研究科副研究科長・教養学部副学部長、2011年同大学評議員、2012年同大学副学長、2013年東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長、2015年同大学理事・副学長。1991年にブルデュ『ディスタンクシオン』の翻訳により渋沢・クロデル賞を受賞。2001年に『ロートレアモン全集』で日本翻訳出版文化賞および日仏翻訳文学賞を受賞、2009年『ロートレアモン 越境と創造』で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。同年4月、上記の論文「ロートレアモン 越境と創造」で学術博士。ロートレアモンを専門にしながら、数々の分野をまたぐ多数の翻訳でも知られる（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9F%B3%E4%BA%95%E6%B4%8B%E4%BA%8C%E9%83%8E> 参照。2017年1月3日閲覧）。

稲垣は1951年愛知県生まれ。1970年、東京教育大学（現・筑波大学）付属駒場高等学校卒業。1974年、東京大学教養学部教養学科フランス科卒業。1974年1975年、フランス・アミアン大学文学部修士課程留学（国際ロータリー財団奨学生）1977年東京大学大学院人文科学研究科（仏語仏文学）修士課程修了。1978年パリ第3大学博士課程留学（フランス政府給費留学生）、1981年同大学文学博士号（仏文学比較文学部門）取得。1982年京都大学教養部助教授。1992年国際日本文化研究センター研究部助教授併任（～1994年3月）。1992年京都大学総合人間学部に配置換え。1997年京都大学総合人間学部、大学院人間・環境学研究科教授。2003年京都大学大学院人間・環境学研究科に配置換え。2017年退官、名誉教授。ヴィクトル・ユゴー、サン＝テグジュペリを中心とする近現代フランス文学、19世紀における宗教と科学、服飾史などのフランス文化社会史、日仏比較文学・比較文化を専門とし、とりわけユゴー研究に関して評価が高く、Le Figaro（Le Monde と並ぶフランスの二大新聞の一つ）2008年2月7日掲載の、フランス以外のフランス文学研究者に関する記事において外国の主たる Victor Hugo 研究者6名のうちの一人として Naoki Inagaki の名前が挙げられた。1984年日本翻訳家協会より、稲垣の翻訳した『ユゴー

詩集』に対し、第21回日本翻訳文化賞が贈られている（京都大学大学院人間・環境学研究科 総合人間学部ホームページ [https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic_f/faculty_f/223_inagaki_n_0/] 及び京都大学教育研究活動データベース [https://kyouindb.iimc.kyoto-u.ac.jp/j/vZ5bZ] 参照。2017年1月3日閲覧）。

松田は1947年愛知県生まれ。1966年に東海高等学校を卒業、1970年名古屋大学文学部卒業、1971年フランス政府給費留学生として留学。1974年名古屋大学大学院文学研究科修士課程退学。2007年京都大学博士（人間・環境学）。1974年より京都大学助手（人文科学研究所西洋部）。1979年より高知大学人文学部助教授。1987年に京都大学教養部助教授に就任し、1992年に同大学総合人間学部に配置換。1994年から同教授。1992年から1994年まで国際日本文化研究センター助教授、1994年から2000年までは国際日本文化研究センター教授を併任し、2000年にはフランス国立社会科学高等研究院客員教授となる。2003年に京都大学大学院人間・環境学研究科教授に配置換となる。2006年パリ第7大学客員教授。2012年には京都大学大学院人間・環境学研究科を定年退職し、同年京都外国語大学外国語学部教授に就任する。2015年に同大学を定年退職し、2016年より神田外語大学日本研究所客員教授をつとめている。松田の専門は日本洋学史、日欧知識交流史、書誌学、近世京都学であり、主著に『洋学の書誌的研究』（臨川書店、1998年）がある。同著作に対して、1998年、財団法人高知市文化振興事業団より高知出版学術賞（第9回）受賞。同年 新村出（しんむら・いずる）記念財団より第18回「新村賞」受賞（松田清研究室のホームページ [http://www.eonet.ne.jp/~dodonaeus/index.html] 参照。2017年1月5日閲覧）。

松島は1942年神戸市生まれ。1965年京大文学部仏文科卒、1971-1972年のフランス留学を経て、73年同大学院文学研究科博士課程満期退学。1973年から1987年まで、神戸商船大学助教授（商船学部）。1987年から京都大学教養部助教授、1992年に教授。同年総合人間学部に配置換。2003年には京都大学大学院人間・環境学研究科教授に配置換となる。2006年定年退官。フランス文学に限らず、文芸理論一般を記号学とレトリック（修辞学）の観点から研究した。またシャンソンにも造詣が深く、文筆や講演などでシャンソンの魅力を日本に広めた。著作に、『物語の迷宮 - ミステリーの詩学（共著）』（有斐閣、1986年）などがある（http://researchmap.jp/read0012546/ 参照。2017年1月5日閲覧）。

多賀は1957年京都市生まれ。1975年京都大学文学部入学、1979年京都大学文学部哲学科美学美術史学科卒業。1979年京都大学大学院文学研究科フランス語フランス文学科入学、1981年同研究科博士前期課程（修士課程）修了。同年同研究科博士後期課程進級。1983年パリ第4大学（フランス語研究科）博士課程留学。1989年同大学博士号取得。1989年京都大学文学研究科フランス語フランス文学科博士後期課程修了、1989年和歌山大学経済学部専任講師、1990年同大学同学部助教授を経て、1992年京都大学教養部助教授。1992年京都大学総合人間学部に配置換となる。2003年に京都大学大学院人間・環境学研究科教授に配置換、2015年より同研究科教授。多賀は制度文化論、フランス18世紀思想、フランス現代思想、精神医学史、都市論を専門としている。（京都大学大学院人間・環境学研究科 総合人間学部ホームページ [https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic_f/faculty_f/114_tagas_0/] 参照。1月5日閲覧）。

2-2-4. 教養部におけるフランス語教育・研究

最後に、教養部におけるフランス語教育の特色について述べておこう。文学部の項でも触れたように、京都大学におけるフランス語教育は文学部と教養部の協力によって成り立ってきた歴史がある。教養部の教員は毎年文学部に出向し、文学の講義を受け持ってきた。ここにも見られるように、両部の人的交流も盛んであったわけであるが、両部の教員の変遷を見ると、フランス語教室の最初期の教員であった伊吹武彦、生島遼一のように、一般に文学部に教養部フランス語教室の教員が補充されるというケースが多かったようである。また、フランス語教室に関して特筆すべき点は、いわゆる「京大文法」、『新初等フランス語教本——文法編』を編纂し、全国の多くの大学で教科書として採用されたということがある。

2-3. 総合人間学部および人間・環境学研究科

上記の経緯を経て1992年、1993年にそれぞれ誕生した人間・環境学研究科及び総合人間学部であるが、設立当初は他学部のように大学院に学部が所属するという形ではなく、両者は独立して存在するという形をとっていた。しかし2003年、両者の教員組織は統合されることになる。それゆえ、本稿では両者をひとまとめに扱い、現在に至る所属教員について述べることにする。ここで、所属する教員について記述しよう。1992年以降に人間・環境学研究科に在籍した、またはしているフランス学に直接的に関わる教員のうち、上述していないものは、西山教行と塩塚秀一郎である。

西山は1961年東京生まれ。1984年明治大学文学部文学専攻卒業。1987年、明治大学大学院文学研究科仏文学専攻博士前期課程修了。1991年明治大学大学院文学研究科仏文学専攻博士後期課程修了。1988年より1990年まで、ロータリー財団奨学生としてポール・ヴァレリー大学(モンペリエ第三大学)に留学。1994年より1995年まで、フランス政府給費留学生としてフォントネ・サンクルー高等師範学校附属フランス語普及教育センター(CREDIF)に留学(外国語としてのフランス語教育学専攻)。1999年より2005年まで、新潟大学経済学部助教授。2004年より2005年まで、文部科学省派遣在外研究員(レウニオン大学、パリ第三大学)。2005年より、京都大学大学院人間・環境学研究科外国語教育論講座助教授。2012年より京都大学大学院人間・環境学研究科外国語教育論講座教授。西山の専門は言語教育学、フランス語教育学、言語政策、フランス社会文化論、植民地教育、フランコフォニー研究である。日本言語政策学会の副会長(2015年・2017年)や日本フランス語教育学の会長(2015年-)をつとめ、国内外で盛んに研究・教育活動を行なっている。2013年芸術文化勲章シュヴァリエ級を受勲((京都大学大学院人間・環境学研究科 総合人間学部ホームページ [https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic_f/faculty_f/114_tagas_0/] 及び西山教授のホームページ [http://www.flae.h.kyoto-u.ac.jp/index_jp.htm] 参照。1月5日閲覧)。

塩塚は1970年福岡県生まれ。1993年東京大学教養学部卒業。1995年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。2000年パリ第3大学博士課程修了、博士(文学)。2001年から2005年ま

で、北海道大学大学院文学研究科助教授。2005年から2010年まで、早稲田大学理工学術院准教授。2010年から2012年まで、早稲田大学理工学術院教授。2012年から2015年まで、京都大学大学院地球環境学堂准教授。2015年から、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。塩塚はフランス文学・文化を研究対象とし、とりわけフランスの近現代文学に造詣が深い。翻訳にもすぐれ、2013年のレーモン・クノー『リモンの子供たち』の翻訳に対し、第20回日仏翻訳文学賞が贈られた。

3. 人文科学研究所

3-1. 沿革：人文科学研究所西洋部設立から現在まで

ここでは、京都大学人文科学研究所におけるフランス系研究の歴史を追っていく。ここでも、まず沿革を述べたのち、フランス研究について述べるという形をとりたい。京都大学人文科学研究所は、1939年京都帝国大学に附置された。しかしながら設置当初の目的は東アジアの総合研究であって、フランスを含むヨーロッパ研究が人文研において開始されたのは、1946年の研究機構の再編成を経て、1949年に外務省管轄の東方文化研究所と、社団法人西洋文化研究所が統合されて以来のことである。1946年の再編成では「世界文化に関する人文科学の総合研究」を行うという新たな目的が定められたものの、在来の乏しい所員数のため、アジア部以外にはアメリカ部のみが設置された。1947年より東方文化研究所および西洋文化研究所を統合する機運が起り、1949年より新しい人文科学研究所が発足した。この新生人文科学研究所には、日本部、東洋部、西洋部が設置された。

このように、西洋文化研究所は西洋部の前身とも言えるため、西洋文化研究所の沿革もここで述べておきたい。西洋文化研究所の前身は1934年に設置された、社団法人独逸文化研究所である。これは日独文化に関する知識の増進、並びに日本国内におけるドイツ文化に関する知識の普及を図るもので、いわば文化センターの一種であった。京都大学構内、現在の人文研本館の位置に設置された。設置の背景には、ナチス政権の発足と日本のドイツ接近があり、京大総長及び文部大臣の指名する十数名の理事、中日ドイツ大使、同総領事と日本財界から選ばれた数名の理事を中心に運営された。第二次大戦の敗戦を迎えると、研究所は建物、蔵書共に接収され、研究活動再開の目処が立たない状況になった。この状況を受けて、1946年、研究所は社団法人西洋文化研究所と改称し、数名の研究員に委嘱して欧米文化の研究に当たらせることになったが、一切の設備が凍結された当時、麻痺状態からの脱出は困難であった。1947年になって、所屋、財産の京都大学への移管と寄付を前提に京都大学人文科学研究所との統合が取り沙汰され始め、統合が実現するのは上述のように1949年のことであった。旧人文科学研究所の競技委員会には関係諸学部の学部長などが参加していたのに対して、新たな人文科学研究所の協議委員は専任教授で構成することが決定され、学内諸学部から相対的な独立を持つこととなった。

こうして、11部門、教授11、助教授14、助手19からなる新しい人文科学研究所が正式に発

足した。その後1988年までに9部門が増設され、多分野の研究が行われた。2000年4月、人文科学研究所の全面的な改組が行われる。この結果、従来の小部門の制度が改められ、大部門制が取られることになった。その結果、従来西洋部、東洋部、日本部の3部のもとに20部門が存在していたのが、人文学研究部、東方学研究部の2部のもと、文化研究創成部門、文化生成部門、文化連関部門（以上3つが人文学研究部に所属）、文化表象部門、文化構成部門、東アジア人文情報学研究センター、現代中国研究センター（以上4つが東方学研究部に所属）が存在するという構成が取られ、現在に至っている。また、2006年4月にはイタリア国立東方学研究所およびフランス国立極東学院京都支部との連携のもと、人文学国際研究センターが、2007年4月には大学共同利用機関法人人間文化研究機構との共同により現代中国研究センターが発足し、新たな研究体制の構築をすすめている（京都大学人文科学研究所ホームページ [http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/] 参照、2017年1月24日閲覧）。

3-2. 共同研究について

人文科学研究所の大きな特色の一つに、所員が協力して行われる共同研究の存在がある。共同研究の方法自体は、前身の一つである東方文化研究所より行われていたものであるが、戦後大きく推進されることになった。本稿では、その原動力となった桑原武夫の紹介と共に、どのように共同研究が発展してきたかを見たのち、現在までのフランス系の共同研究の代表者にこういった人物がいたかを確認する。

共同研究という手法を発展させ、それを人文研の特色にまで高めたのは、桑原武夫であった。桑原武夫は、1904年福井県敦賀生まれ。父は京都帝国大学教授（東洋史専攻）の桑原隲蔵であった。京都一中を出て1922年に第三高等学校に入学。フランス語のクラスを選んだ理由については、「とくに確固たる理由があったわけではない。中学時代、永井荷風、谷崎潤一郎を耽読し、その文章の裏に潜むフランス文化への憧れに感染していたところへ、楠山正雄訳の『シラノ・ド・ベルジュラック』を読んで感激してフランス語に決めた程度である」と述べている（桑原武夫「自跋」、『桑原武夫集1』、p. 626）。文科丙類の同級には三好達治、丸山薫、吉村正一郎、貝塚茂樹、中村吉治などがいた（桑原武夫「半世紀の思い出」、『桑原武夫集10』、p. 101）。1925年京都大学仏文科に入学。太宰施門、落合太郎に学び、河盛好蔵、吉川幸次郎、進藤誠一、吉村正一郎、生島遼一らと親しく交わる（桑原武夫「自跋」、『桑原武夫集1』、p. 637 及び、桑原武夫「自己解説」、『桑原武夫集4』、p. 211）。他に、山岳部に所属し、今西錦司、西堀栄三郎と接する（桑原武夫「思い出すこと忘れえぬ人」、『桑原武夫集8』、p. 138）。こうした人脈が後のアカデミックな活動に繋がっていくことは付記しておいてよいだろう。1928年に京都大学を卒業した後、旧制大阪高校、京都大学文学部講師を経て1943年、三高時代の恩師である河野与一に請われ、東北大学に赴任する（桑原武夫「仙台の五年間」、『桑原武夫集7』、p. 414）。1948年までの5年間を過ごすこの東北の地で、後に人文科学研究所で行われる共同研究のアイデアが胚胎することになる。余談ではあるが、桑原は、自身を東北大学に推挙した河野について、「学問を可能な限り現実から切り離して精密、丁寧に観照、研究される先生の学風にはついについて行けなかった」（桑原武夫「自

跋』、『桑原武夫集 1』、p. 629) と述べている。形而上の学問を重視する河野が社会と学問の関わりを重視する共同研究の端緒となったというのは興味深い。さて、人文研の前身である東方文化研究所では当時から共同研究が行われており、それを東北から見ていた桑原は「健羨の情にたえなかった」という（桑原武夫「人文科学における共同研究」、『桑原武夫集 7』、p. 385）。しかし東北という地理的状况は、必ずしもマイナスの作用をしたわけではなかった。桑原によれば、特に敗戦後、東北ではかなり盛んに文化活動がされていたようで、それは東北地方の後進性を自覚した指導者たちが熱心に推進したためであるという。また、仙台の学者のサークルは小さく、学際的な交わりが日常的に生まれていた。こうした状況が、「1948 年秋から転任した京都大学人文科学研究所での共同研究のためのウォーミングアップになっていた」のである（桑原武夫「自跋」、『桑原武夫集 2』、p. 611、616）。先に述べたように、京都大学人文科学研究所は 1949 年から新体制をスタートさせるのであるが、桑原はこの新天地において、共同研究という方法論を強力に推進する。共同研究を重視するという着想は、桑原によると、安倍健夫初代所長によって決められたものであるという（桑原武夫「人文科学における共同研究」、『桑原武夫集 7』、p. 385）。しかし桑原の並々ならぬ決意は、最初の共同研究『ルソー研究』の力が入った序文に現れている。少々長くなるが引用したい。「日本の学会の宿弊ともいべきセクショナリズムの結果、日本の学者の多くが悪しき意味の専門家となり、文化の他の分野に関する理解に乏しいことは、海外の学者に接触しつねにわれわれの痛感させられるところだが、この宿弊の打破は掛け声のみでは効果はない。そうした弱点を自覚した学者が、異なった専門を持ちつつ、しかも共同で、現実には仕事を試みる以外に救われる道はないのである」（桑原武夫『「ルソー研究」序言』、『桑原武夫集 3』、p. 225）。ルソーを最初の共同研究の題材として選んだのも、ルソーという多方面に業績が渡る巨人を扱うのに、共同研究という方法が必須であったということ、そして、共同研究という方法を試みるのにつけての題材であったということ、この両面があると桑原は述べている（桑原武夫「人文科学における共同研究」、『桑原武夫集 7』、p. 388）。

桑原は 1959 年から 1963 年まで人文科学研究所の所長を務め、1968 年に退官する。その後桑原は 1974 年勲二等瑞宝章、1977 年日本芸術院会員、1979 年文化功労者、1987 年文化勲章など、幾多の栄誉に輝き、1988 年に没した。人文研で桑原が率いた共同研究は、成果として発表されたタイトルで言えば『ルソー研究』（岩波書店、1951 年）、『フランス百科全書派の研究』（1954 年、岩波書店）、『フランス革命の研究』（岩波書店、1959 年）『ブルジョワ革命の比較研究』（1964 年、筑摩書房）『中江兆民の研究』（岩波書店、1966 年）、『文学理論の研究』（岩波書店、1967 年）があるが、当然桑原以外にもフランスに関わる共同研究は数多くある。参加者全てに触れる余裕はないため、以下には、出版された共同研究の編者として記されている桑原以外の責任者について、それぞれいかなる人物であったか、その略歴を述べることにしたい。人文研の歴史は共同研究の歴史でもあり、その編者の変化を追うことで人文研の歴史を概観することができるであろうからである。

『世界資本主義の形成』（岩波書店、1967 年）、『世界資本主義の歴史構造』（1970 年、岩波書店）、『フランス・ブルジョア社会の成立—第二帝政期の研究—』（岩波書店、1977 年）、『ヨーロッパ

1930年代』（岩波書店、1980年）を編んだ河野健二は、1916年徳島生まれ。1940年京都帝国大学経済学部を卒業、同大学経済学部助手、同大学人文科学研究所助教授、同大学教養部教授を経て、1968年に同大学人文科学研究所教授に配置換えとなり、西洋社会研究部門を担当した。1980年に停年により退官。この間、1970年から1974年、および1978年から1980年まで人文科学研究所長。専門は経済思想史であり、中でも近代フランス社会を中心に研究活動を行なった。著書に、『絶対主義の構造』、『フランス革命とその思想』、『フランス現代史』など。研究所における共同研究の推進についても多大の成果をあげた。退官後は、中部大学国際関係学部長、京都市立芸術大学長、京都市生涯学習総合センター所長などを歴任。また、日仏歴史学会の会長としての活動その他を通し、日本とフランスの学術交流の発展にも力を注ぎ、1975年にはフランス・パルム・アカデミック勲章オフィシェ級、1992年に京都市文化功労者、1993年には京都府文化賞をそれぞれ授与された。1996年没（『京大広報 No. 506』、1996年、p. 107）。

『空間の原型』（筑摩書房、1983年）、『ボードレール「悪の花」注釈上・下』（京都大学人文科学研究所、1986年）、『ボードレール—詩の冥府』を編んだ多田道太郎は、1924年京都府生まれ。1949年京都大学文学部を卒業後、1949年12月京都大学人文科学研究所助手、1957年同講師、1965年同助教授を経て、1976年同教授に昇任、西洋思想研究部門を担当した。1988年停年により退官、京都大学名誉教授。同年明治学院大学国際学部教授に就任、その後は武庫川女子大学教授、神戸山手大学環境文化研究所所長を歴任した。多田は、「ルソー研究」以降の一連の共同研究に参加するとともに自身でも「ボードレールの研究」を主宰し、その成果は『悪の花注釈』（全2巻）として公刊され、フランス学会で高い評価を受けた。また、『クラウン仏和辞典』の編纂に従事し、その功績により1978年には毎日出版文化賞を受賞。こうした仕事に加えて、ファッション、しぐさ、遊びなど、日本人の日常文化にも多大かつ広範な興味を示し、多数の著書を残すとともに、1976年からは「現代風俗研究会」を主宰し、この方面での後進研究者の育成をはかった。その著作のほとんどは現在『多田道太郎著作集』（全6巻）で読むことができる（『京大広報 No. 631』、2008年、p. 2555）。

『モンテスキュー研究』（白水社、1984年）、『空間の世紀』（1988年、筑摩書房）を編んだ樋口謹一は、1949年京都大学文学部史学科を卒業、同大学人文科学研究所助手、同志社大学法学部専任講師、同助教授、京都大学人文科学研究所助教授を経て、1980年教授に就任、西洋社会研究部門を担当した。1988年停年により退官、京都大学名誉教授。その後、1989年から1996年まで仏教大学社会学部教授。専門はヨーロッパ政治思想史であり、とりわけジャン＝ジャック・ルソーを中心とした18世紀フランスの政治思想の研究に取り組んだ。主著『ルソーの政治思想』にまとめられた論考は、ルソーの生涯と人間に注目しながら政治思想の特性を根柢から解明すると同時に、とりわけルソーの平和思想のもつ意義を18世紀の国際関係の現実のなかに位置づけようとするものである。また、人文研における共同研究として、「モンテスキュー研究」および「18世紀ヨーロッパの空間認識」を組織、若手研究者の指導・養成にも多大の努力を払った。その成果は上述の2冊の編著としてまとめられている。さらに、樋口は日本平和学会の設立に尽力し、1985年から2年間は同学会の会長を務め、平和研究の発展に大きく貢献した（『京大広報

No. 587』、2004 年、p. 1640)。

『1848 国家装置と民衆』(1985 年、ミネルヴァ書房)、『人文学のアナトミー』(1995 年、岩波書店)、『統治技法の近代』(1997 年、同文館出版)、『人文・社会科学と自然科学の対話の試み』(2000 年、京都大学人文科学研究所)、『ダーウィン以後の人文・社会科学』(2001 年、京都大学人文科学研究所)、『変異するダーウィニズム』(2003 年、京都大学学術出版会)を編んだ阪上孝は、1939 年神戸生まれ。1958 年私立灘高校を卒業し、京都大学経済学部入学、1962 年同卒業。1962 年、日本スピンドル製造株式会社入社、1963 年同退職、1964 年京都大学大学院経済学研究科修士課程入学、1966 年同修了、同年京都大学人文科学研究所助手に採用。1973 年大阪市立大学経済学部講師、1975 年同教授。1976 年人文研助教授、1988 年同教授。1993 年から 1997 年まで、2001 年から 2003 年まで人文研所長、京都大学評議員。2003 年定年退官。のち中部大学人文学部教授、中部高等学術研究所副所長、2010 年同退職。阪上はフランスの社会思想を専攻し、ルソー、モンテスキューら 18 世紀の思想家のみならず、アルチュセールなどの翻訳なども残している(『人文学報』、2004 年、90 号、pp. 215-219)。

『フランス・ロマン主義と現代』(1991 年、筑摩書房)、『象徴主義の光と影』(1997 年、ミネルヴァ書房)、『アヴァンギャルドの世紀』(2001 年、京都大学学術出版会)、『日仏交感の近代—文学・美術・音楽』(2006 年、京都大学学術出版会)を編んだ宇佐美齊は、1942 年愛知県生まれ。1961 年京都大学文学部入学、1965 年同卒業(フランス語学フランス文学専攻)、1967 年同大学院文学研究科修士課程(同専攻)修了。同年関西学院大学文学部専任助手。1969 年から 1971 年まで、フランス政府給費留学生としてパリ第 10 大学大学院博士課程(フランス文学専攻)在学。1972 年関西学院大学文学部専任講師、1976 年同助教授。1980 年京都大学人文科学研究所助教授、1993 年同教授。2006 年同定年退職、京都大学名誉教授。他に、1986 年にパリ第 7 大学客員教授、1990 年から 1993 年に国際日本文化研究センター客員助教授、2001 年にはトゥルーズ・ルミライユ大学日本学科客員教授を務めたほか、2003 年から 2005 年まで日本フランス語フランス文学会関西支部長、2005 年から 2007 まで同会副会長を歴任した。1990 年には著書『落日論』で第 2 回和辻哲郎小文化賞を受賞、1999 年にはフランス政府よりパルム・アカデミック勲章(シュヴァリエ級)を授与されている。宇佐美の専門はランボーをはじめとしたフランス詩であるが、中原中也など日本の詩についても造詣が深い(『人文学報』、2013 年、103 号、pp. 155-168)。

『文学をいかに語るか』(1996 年、新曜社)、『共同研究 ポルノグラフィー』(2001 年、平凡社)、『フィクション論への誘い—文学・歴史・遊び・人間』(2013 年、世界思想社)を編んだ大浦康介は、1975 年京都大学文学部仏文科卒、1986 年同大学院博士課程満期退学。パリ第 7 大学第三課程博士。1986 年京都大学助手、1987 年甲南女子大学助教授、1989 年京都大学人文科学研究所助教授、2004 年同教授、2017 年定年、名誉教授。2002 年から 2003 年までは、日本フランス語フランス文学会関西支部代表幹事を務めた。1997 年にはフランス政府よりパルム・アカデミック勲章を授与されている。専門は、文学・表象理論など(Web ページ「research map」[<http://researchmap.jp/read0012981/>] 参照。2017 年 7 月 1 日閲覧)。

『啓蒙の運命』(2011 年、名古屋大学出版会)を編んだ富永茂樹は、1968 年滋賀県立膳所高等

学校卒業。1969年京都大学教育学部入学、1973年同卒業。同年京都大学大学院文学研究科修士課程入学、1975年同修了。同年同博士課程進学。1976年、パリ第一大学第三期博士課程登録、1980年京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。1980年京都大学研修員（日本学術振興会・特別研究員）。1981年長崎大学講師（教養部）。1984年京都大学助教授（人文科学研究所）。1991年応用認識論研究センター（パリ）特別研究員。2000年京都大学教授。2004社会科学高等研究院（パリ）招聘教授、2005年博士（文学、京都大学）。2015年京都大学退職（同・名誉教授）。富永の専門は知識社会学。著書に、『健康論序説』（1977年、河出書房新社）『都市の憂鬱』（1996年、新曜社）『ミュージアムと出会う』（1998年、淡交社）他。編著『資料 権利の宣言—1789』（2001年、京都大学人文科学研究所）『文化社会学への招待』（共編、2002年、世界思想社）他。訳書 フェレ／オズーフ編『フランス革命事典』（共同監訳、1995年、みすず書房）ゴーシェ『代表制の政治哲学』（共訳、2000年、みすず書房）他がある（『人文学報』、2016年、109号、pp. 201-208）。

『現代思想と政治』を編んだ市田良彦は、1957年兵庫県西宮市生まれ。大阪府立北野高等学校を経て京都大学経済学部卒業、同大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。大阪女子大学講師、1995年神戸大学国際文化学部助教授、のち同大学院国際文化学研究科グローバル文化専攻教授。専門は社会思想史（Wikipediaの市田の記述 [<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B8%82%E7%94%B0%E8%89%AF%E5%BD%A6>] 参照。2017年7月1日閲覧）。

市田と同じく『現代思想と政治』を編んだ王寺賢太は、1970年生。パリ西大学博士（文学）。京都大学人文科学研究所准教授。専門は思想史。『両インド史』批評校訂版編集委員。主要業績に *Éprouver l'universel: Essai de géophilosophie* (Kimé, 1999年、共著)、『現代思想と政治—資本主義・精神分析・哲学』（平凡社、近刊、共編）、ドニ・ディドロ『運命論者ジャックとその主人』（白水社、2007年、共訳）、《Civilisation et naissance de l'histoire mondiale dans l'Histoire des deux Indes》(Revue de synthèse, 2008/1)、《Raynal, Necker et la Compagnie des Indes》(G.Bancarel (éd.), Raynal et ses réseaux, Champion, 2010)、「一般意志の彼方へ—『諸意志の協調』とディドロ晩年の政治的思考」（『思想』2013年12月号）、《La fin de l'Ancien Régime en Europe selon l'Histoire des deux Indes》(A. Lilti et C. Spector(éd.), Penser l'Europe au XVIIIe siècle, Voltaire Foundation, 2014年) などがある（勁草書房のホームページ [<http://www.keisoshobo.co.jp/author/a74386.html>] 参照。2017年7月1日閲覧）。

最後に、人文研が主宰した「ヨーロッパ探検」について触れておく。正式名称「京都大学ヨーロッパ学術調査隊」、通称「ヨーロッパ探検」は、1967年度（桑原武夫ほか7名）、1969年度（会田雄次 [1916-97] ほか7名）、1972年度（会田ほか7名）の三次にわたって実施され、イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、イタリア、スイス、ユーゴスラヴィア、トルコなどの調査が行われた。この調査の実質的発案者であり推進者である梅棹忠夫（1920-）はその目的を「ヨーロッパ地域学の立場」として提起している。日本人がヨーロッパを調査することによって、ヨーロッパ人が非ヨーロッパ人を調査・記述するという非対称な関係性に異議申し立てを行い、ヨーロッパ文明を規範とみなす固定観念を相対化する、というのがそのねらいだという。じじつ、この調査の参加者から、着実なフィールドワークと資料調査に根差した新世代のヨーロッパ研究者が輩

出されることとなる。報告書は会田・梅棹編『ヨーロッパの社会と文化』（1977）のほか、朝日新聞社から桑原編『素顔のヨーロッパ』（1969）が刊行されている。第1次調査に同行した多田道太郎は、フランスのランデダという小自治体で暴漢に襲われ、首を締められるという受難にあった。そのことを報じる現地の新聞記事も残されている（以上、人文〔2009、特別号（京都大学人文科学研究所創立80周年）〕に拠った）。